

☆主の降誕[夜半](12月25日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 9章 1-3、5-6節)

闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。
あなたは深い喜びと大きな楽しみをお与えになり
人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように
戦利品を分け合って楽しむように。
彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を
あなたはミディアンの日のように折ってくださった。
ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。
権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神
永遠の父、平和の君」と唱えられる。
ダビデの王座とその王国に権威は増し平和は絶えることがない。
王国は正義と恵みの業によって今もそしてとこしえに、
立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

第二朗読 (使徒パウロのテスへの手紙 2章11~14節)

愛する者よ、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました。
その恵みは、わたしたちが不信心と現世的な欲望を捨てて、この世で、
思慮深く、正しく、信心深く生活するように教え、また、祝福に満ちた希望、
すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの
栄光の現れを待ち望むように教えています。
キリストがわたしたちのために御自身を献げられたのは、わたしたちを
あらゆる不法から贖い出し、良い行いに熱心な民を御自分のものとして
清めるためだったのです。

福音朗読（ルカによる福音書 2章 1～14節）

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。

ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。

ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。

恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

クリスマスおめでとうございます。カタカナで表現するとなんだか軽い感じですね。そこで、救い主のご降誕おめでとうございます。誰もが待っていた日です。世の中少し違った祝い方をしているようですが、まあ良しとしましょう。私たちにとってはこれで終わりではなく、ここからが始まりなのです。イエス・キリストは私たちに呼びかけておられるのですから。神を愛し、隣人を愛する、隣人を大事にすることを願っておられるのですから。

第一朗読（イザヤの預言 9章 1-3、5-6節）

「闇の中を歩む民」、「死の陰の地に住む者」。絶望のうちに生きている民に救いのメッセージが告げられます。今の人類がまさにそのようです。必死にもがいている人類。「一人の嬰兒が私たちのために生まれた」。「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」。なんと力強い言葉でしょうか。この救いの御業は主の熱意なのです。少しでも多くの人、すべての人を救おうとされる主の思いなのです。それを成し遂げるのは「一人の嬰兒」です。誰にも想像できなかった永遠の傑作です。私たちはその英知に静かにひざまずきましょう。

第二朗読（使徒パウロのテスへの手紙 2章11～14節）

この手紙ではパウロは自分たちの信ずる教えの神髄を述べています。「祝福に満ちた希望で、イエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように」と。それには「不信心と現世的欲望を捨てること、信心深く生活すること、希望をもって主を待ち望むことが必要」と述べています。

福音朗読（ルカによる福音書 2章 1～14節）

ルカは救いの歴史の始まり、イエスの誕生が歴史的事実であったことを述べようと、その時代のローマ皇帝の名前を挙げて証言しています。これによって今の私たちにはいつどこでどのようにしてその事実が実現したかを知ることができるのです。誰かの想像の産物ではないのです。そしてそれは当時の政治的動きに影響を受けながらひっそりと静かに行われたのです。それもとても貧しい一組の夫婦を通して。またその知らせは社会的な弱者であった羊飼いたちに真っ先に知らせられました。そしてそのことを告げた天使の後に、もう黙っていることができない天使の大群が夜空いっぱい広がって、神の御業の妙なることを賛美し歌ったのです。

神の天使たちにとって私たち人類の救いは最大の願望だったのです。神から創造された被造物としての仲間意識でしょうか、主である神に対する人類の離反は天使たちにとっても本当に悲しい出来事でした。ですからすべての人類の救いは本当に天使たちの心からの願いでもあったのです。そう思うとなんだかほっこりしますね。今宵は天使たちの歌声を聞きながら、幼子イエスを礼拝しに出かけましょう。天使たちが私たちの歩む道を照らしてくださるでしょう。

“Puer natus est pro nobis” 「一人のが私たちのために生まれた」

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光